

「男脳・女脳」言説の中の「脳」

筒井 晴香

東京大学大学院総合文化研究科／日本学術振興会特別研究員（DC1）

脳や脳科学に関する言説が一般大衆の間で人気を集めるようになって久しい。この「脳ブーム」的状况からは、脳や脳科学という話題が人々にとって強いインパクトと魅力を持っていることが伺える。

発表者はこれまで、脳をめぐる一般向け言説の中でも特に高い関心を呼ぶ話題の一つである「脳の性差」に関する言説に注目し、その特徴や背景、懸念される社会的影響について考察を行ってきている。今回の発表では、特に脳・脳科学のイメージという観点からこれらの言説に注目する。一般向けの文脈において、脳への言及がどのような含意を持ってなされているのか。また、その背景には、脳・脳科学に対するどのようなイメージがあるのか。この点の考察を通して、今後の脳科学リテラシー教育が目指すべきあり方について考える上での手掛かりを得たい。

脳の性差をめぐる言説は、近年、一般向け書籍や雑誌記事、テレビ番組等において頻繁に登場している。ピース&ピース著『話を聞かない男、地図が読めない女——男脳・女脳が「謎」を解く』（藤井留美訳、主婦の友社、2002年）は複数の国でベストセラーとなり、日本においても翻訳や、多数の類書が出版されている。また、2009年にはNHKで3回連続シリーズのドキュメンタリー「女と男～最新科学が読み解く性～」が放映され、そのうち第1回・第2回で脳の性差が主要な話題の一つとなった。

脳の性差を扱った一般向け言説の中には、いくつかの点で問題含みのものが見られる。本発表ではそのような言説を、その中で多用される表現にちなんで『「男脳・女脳」言説』と呼ぶ。

「男脳・女脳」言説は次のような強い主張を含んでいる。近年の脳科学研究によれば、男女の脳には明確な差があり、その差は男女間における行動傾向や能力等の差異を形作っている。この差異は、社会的影響のみによっては決して説明できないものである。我々の社会生活をよりよいものにするためには、一連の差異を正しく認識することが不可欠である。

「男脳・女脳」言説においては、現在明らかになっている脳の性差について、次のような説明がなされる。脳の性差は胎児期のホルモン分泌によって、出生時には既に決定付けられており、その差は認知能力や言語能力、興味の対象や行動傾向等における明確な性差を生んでいる。例えば、女性は言語能力に優れ、お喋りで感情豊かであり、人間関係の調和を重視する。他方、男性は空間認知能力に優れ、寡黙で、論理的な話し方をし、目的の達成を重視する。「男脳・女脳」言説においては、これらの差異は全て、脳の性差によって動かし難く決定づけられたものであると強調される。

この種の言説における科学的知見の紹介には、誇張や単純化、拡大解釈が散見される。まず、脳の性差は遺伝子・ホルモン・環境・経験といった複数の要因が互いに相

相互作用しながら生み出されていると考えられており、胎児期のホルモンが決定要因であるといった強い主張は裏付けを持たない。また、脳における構造・機能上の性差は、必ずしも能力や行動傾向の性差を生むとは限らない。能力や行動傾向に関しては、性差があっても個人差に比べきわめてわずかであるという報告もなされている。そして、脳の性差や能力・行動傾向の性差は必ずしも動かし難いものではなく、経年変化や訓練による解消も報告されている。

「男脳・女脳」言説においては、具体的な引用・言及の不正確さには留まらない問題も見られる。それは、我々が社会の中で性差をどのような差として扱うべきかという問題に対し、脳の性差に関する科学的知見が決定的な答えを導くかのように論じられる点である。「男脳・女脳」言説においては、脳の性差に従った生き方は我々にとって自然で本来的であるがゆえに、望ましいあり方とされ、人々はみな本心では脳の性差に従った生き方を望んでいるのだという主張がなされる。

このような特徴を持った「男脳・女脳」言説は、単なる科学読み物や科学番組とはやや異なった様相を呈している。「男脳・女脳」言説の関心は脳や脳科学そのものではなく、脳の性差という話題を通じて、人々の性格や価値観のあり方に説明を与え、あるべき生き方を示すといったところにある。

以上が「男脳・女脳」言説の概要である。この中で「脳の性差」はどのような差として、また「脳」はどのようなものとして捉えられているだろうか。

「男脳・女脳」言説では、「男女は脳が違う」「脳に性差がある」といった主張が、男女の違いを決定づけるものとして登場する。だが、脳の性差とは人間の間に決定的な違いを生み出すような差なのだろうか。

そもそも「脳に性差があるか否か」という問いに対し、単純な仕方で答えることは困難である。脳において、性に応じた差がどの程度見られるのか。その性差にはいかなる要素が影響しており、またいかなる結果をもたらしているのか。これらの問いへの答えは、脳科学の枠内でも、どのような脳部位や機能に着目するかにより異なってくる。

「男脳・女脳」言説においては、脳科学内部での専門領域の多様性や、各専門領域に応じた「脳の性差」への関心のあり方はほとんど顧みられず、「脳に性差がある」という主張に、人間の間の性差が決定的なものであるという含意がこめられる。ここでは、「脳」それ自体が、一枚岩の実体であるかのように捉えられ、かつ人間の人格や本質に等値されているといえる。

脳ブームの一環である「男脳・女脳」言説における「脳」のイメージは、「人間の本質に当たる単一の実体」と言い表すことができよう。人間の脳が実際にこのようなものであるとは言い難い。しかし、このような「脳」像、そしてそれを用いた、人間の生き方についての言説が、少なからぬ人々から共感を集め、広く受け入れられているのが現状であろう。人間の本質としての「脳」に訴えた言説への高い関心や需要、より素朴な表現を用いれば、そのような「脳」について知りたい・語りたいという人々の思いは、脳や脳科学をめぐる言説の読まれ方、語られ方に一定の方向付けを与えるだろう。ここには、単に脳科学に関する正しい知識を伝えるだけでは解決しきれない問題があるのではないか。